

## 徳川慶勝写「宝生流能造物図絵」の紹介と翻刻(一)

飯塚 恵理人\*

### はじめに

名古屋市蓬左文庫所蔵の「宝生流能造物図絵」(請求記号・コレクション区分1、請求番号・8-11)一冊は、その奥書に「盛齋写安政五(一八五八)年夏五月廿四日」と記されている。盛齋という徳川慶勝の号が自署されていることから、第十四代尾張藩主であり明治維新後の尾張徳川家第十七代当主である慶勝が、幕府の開国の方針と対立して隠居を命じられる直前期に書写したことが確実である本である。その内容は宝生流の能舞台で用いられる造物(つくりもの)・大道具。実際には手に持つ道具なども一部掲載されている)を曲ごとに図絵を用いて説明している。

本稿ではこの資料の蓬左文庫提供画像コピーを元にして、各図絵とその中の語を翻刻したものを曲ごとにまとめて、掲載順に挙げた。このことにより慶勝が書写した本の内容がよく分かるものと思う。なぜ徳川慶勝がこの本を書いたのか、元の本の素性や宝生流の他の造物図絵との比較などは今後の課題となる。

徳川慶勝については、明治維新の激動期、御役者を一括解雇して

多くを能楽から離れさせた幕府に比して、尾張藩が御役者を兵隊に任用替えしつつ「能楽師」としての権威を守り、結果としてプロの能楽師として生活していける最低限の所得基盤を守ってやったことを鑑みると、能楽をかなり好んでいたと思われる。しかしながら国文学研究資料館の演能データベースに慶勝の記録はない。現時点で分かる慶勝の舞台は明治四(一八七一)年九月十日の梅若実舞台での「宅ノ別段稽古能」が最初である。この時は岡山三位が誘って慶勝と黒田下野守、因州鳥取様若殿、藤堂和泉の五名が赴き、装束を付けて能を舞った。慶勝が勤めた曲は《舍利》《半能 高砂》の二曲であった。「五方より金二千五百疋被下。」の記述から、すでに慶勝が梅若実の能楽パトロンになっていることが伺える。

本が書写された安政五年はその六月に日米修好通商条約が結ばれ、対外強硬派であった慶勝が江戸城へ乗り込んで大老の井伊直弼に直接抗議した波乱の年である。安政五年当時の尾張藩のシテ方御役者は大野時太郎・宝生鍊五郎・丹羽又吉であり、大野藤五郎が切符銀を下されていた。その中で宝生鍊五郎と丹羽又吉が江戸住であったが、江戸にいた慶勝には当然幕府の宝生座の役者達とも接点があったはずで、元本の奥書が写されていない以上、この元本を

持っていたのが尾張藩の御役者ではなく「御相手」を勤めた幕府の宝生座の能役者である可能性も否定できない。慶勝の幕末の能楽の環境については、徳川林政史研究所の資料等も検討し、今後の課題としたい。

本稿は、明治期の能楽パトロン・徳川慶勝の明治維新以前の能楽との関わりを考える上での重要資料を紹介・翻刻するものである。大部なので、本稿では(1-1)《高砂》から(41)《調伏曾我》までの前半を掲載し、(42)《舍利》以降の後半は後日の掲載として二回で完結させる予定である。

### 《翻刻の凡例》

底本に忠実に翻刻することを心がけたが、読解の便宜を考えて以下の点について改めた。

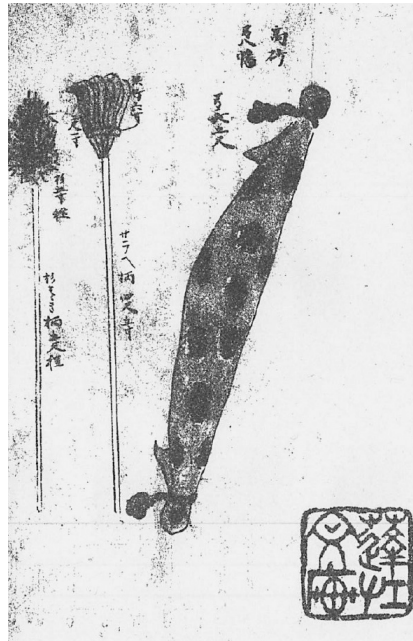
- 1 旧字体は原則として新字体に改め、私に句読点を施した。本文の改行は適時省略した。
- 2 能の曲名は《》で囲んだ。《》の上の半角算数字は、私に付けた曲番号である。
- 3 底本の書き入れは( )で囲み、その書き入れの該当部分に示した。また墨消しとなっている部分は【】で囲み、■は判読不可の字を示す。
- 4 目録曲後の(○頁終)は蓬左文庫所蔵の底本のコピーの頁数であり、「○丁裏表」の表記は用いない。

《曲名一覧》 \*複数の図絵にある曲名は\*-\*と副番号を付けた。

- (1-1)《高砂》、(2)《弓八幡》、(1-2)《高砂》、(3)《氷室》、(4)《志賀》、(5-1)《右近》、(5-2)《右近》(著者注…記載

はないが内容から考えて《右近》の造物である)、(6)《兼平》、(7)《絵馬》、(8)《三山》、(9)《西王母》、(10)《難波》、(11)《白髭》、(12)《九世戸》、(13)《敦盛》、(14)《生田敦盛》、(15)《定家》、(16)《加茂》、(17)《通盛》、(18)《檜垣》、(19)《野々宮》、(20)《半部》、(21)《竹生嶋》、(22)《嵐山》、(23)《松風》、(24)《葛城》、(25)《俊成忠度》、(26)《住吉詣》、(27)《錦木》、(28)《西行桜》、(29)《遊行柳》、(30)《江口》、(31)《羽衣》、(32)《雲雀山》、(33)《小原御幸》、(34)《藤》、(35)《小蝶》、(36)《井筒》、(37)《草紙洗》、(38)《楊貴妃》、(39)《梅枝》、(40)《小鍛冶》、(41)《調伏曾我》(本稿はここまで)、(42)《舍利》、(43)《金札》、(44)《伏見》、(45)《芦刈》、(46)《小督》、(47)《車僧》、(48-1)《玉の井》、(48-2)《同(玉の井)》、(49)《道明寺》、(50)《殺生石》、(51)《唐船》、(52)《鉢木》、(53)《石橋》、(54)《三笑》、(55)《雨月》、(56)《景清》、(57)《国栖》、(58)《綾鼓》、(59-1)《三井寺》、(60)《三輪》、(61)《枕慈童》、(62)《道成》、(63)《籠太鼓》、(64)《歌占》、(65)《照君》、(66)《安宅》、(67)《紅葉狩》、(68)《加茂物狂》、(69)《海人》、(70-1)《高野物狂》、(59-2)《三井寺》、(71)《百萬》、(72)《藤栄》、(73)《蟬丸》、(74)《放下僧》、(70-2)《高野物狂》、(75-1)《輪藏》、(75-2)《同(輪藏)》、(76)《鳥追》、(77)《鶏龍田》、(78)《鉄輪》、(79-1)《黒塚》、(79-2)《同(黒塚)》、(80)《大蛇》、(81)《竹之雪》、(82)《土蜘蛛》、(83)《谷行》、(84)《一角仙人》、(85)《大江山》、(86)《半部 立花》、(87)《項羽》、(88)《山姥》、(89)《木賊》、(90)《呉服》、(91)《浦鳶》

〔翻刻〕  
〔表紙〕  
宝生流能造物図絵

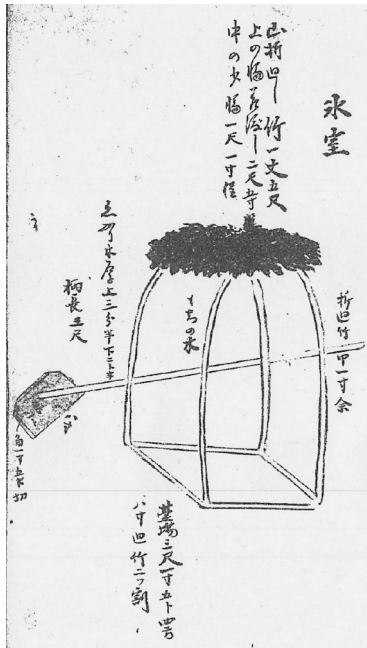


(1-1) 《高砂》  
(2) 《弓八幡》 弓袋五尺 サラへ柄四尺五寸 此竹六寸 二尺二寸  
杉五寸程 杉は、き柄五尺程

(二頁終)



(1-2) 《高砂》 上下ノ輪長式尺四寸横一尺七寸 四角竹四寸廻其  
外三寸廻 松高下り五尺程 長キ方横七本尤角ノ 竹トモ不残左竹  
高二尺五寸 上ノ出五寸 下ノ出三寸



(3) 《氷室》 山折廻し竹一丈五尺、上の輪差渡し二尺五寸程 中  
の少輪一尺一寸程 折廻竹中一寸余もちの木 ゑかり木厚上三分竿

下二分半柄長三尺 八寸 角一寸五分切 台場三尺一寸五分四方  
八寸廻竹二ツ割

(三頁終)

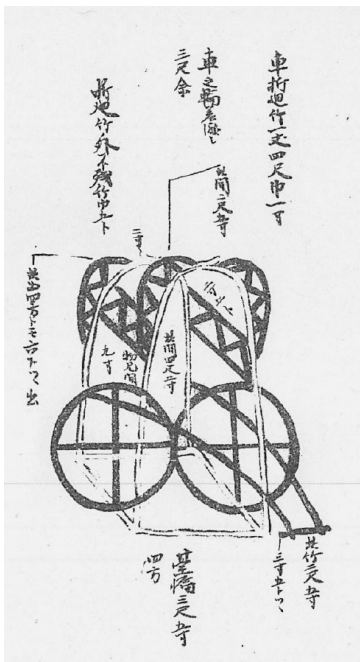


(4) 《志賀》 杖長サ三尺七寸五分程 萩一つかミ程打違結付ル  
桜造花拾本長サ一尺一寸五分サス 三尺余 此紐白布



(5-1) 《右近》 桜造花高下ヨリ五尺程 台輪式尺二寸四分七寸廻  
リ竹二ツ割 二尺二寸四方 高サ二尺二寸 竹巾一寸 持出竹巾一  
寸長サ二尺七寸

(四頁終)



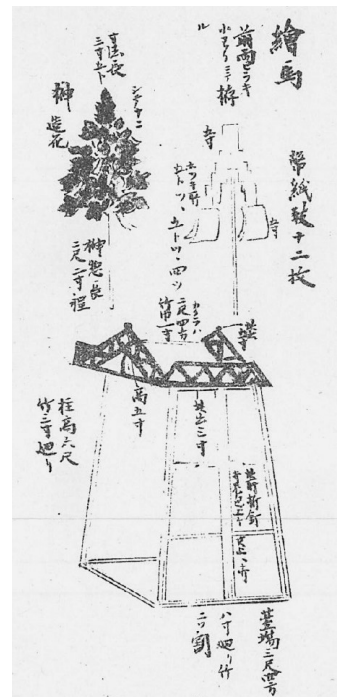
(5-2) 《右近》 車折廻竹一丈四尺巾一寸 車之輪差渡シ三尺余

折廻竹外不残巾五分 此間二尺五寸 二寸五分 二寸ホト 此出四方トモ六分ツ、出 此間四尺二寸物見間九寸 此竹二尺五寸 三寸五分ツ、台輪三尺五寸四方

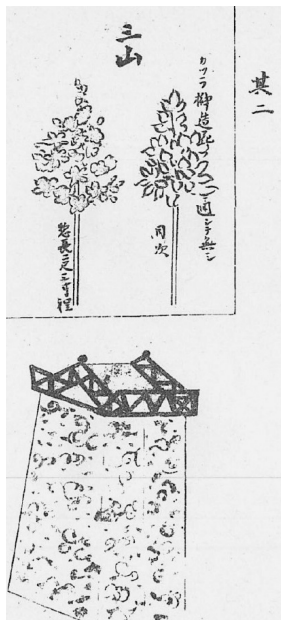


(6)《兼平》 此外ニカイ棒長六尺釣棒長五尺五寸 柴三尺余 小へり五寸 折廻竹長一丈五尺巾一寸 小へり五寸 台場八寸廻り竹二ツ割三尺四方

(五頁終)

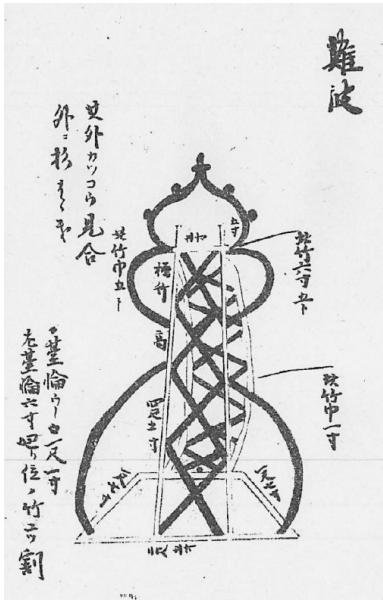


(7)《繪馬》 前両ヒラキ小わりニテ拵ル 寸法三尺三寸五分 シテ■ニ 神造花 神惣長二尺二寸程 幣紙数十二枚 五寸 五寸 木ツキ所五分ツ、五分ツ、四ツ 此出五寸 カクラハ二尺四方竹中一寸 此出三寸 高五寸 柱高六尺竹三寸廻り 此所新釘打所包上ケ其上へ打 台場三尺四方八寸廻り竹二ツ割

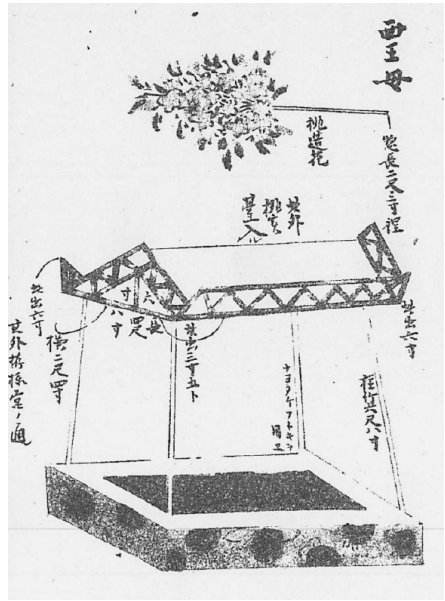


(8)《三山》 其二 カツラ神造花通シテ無シ 同次 惣長二尺三寸程

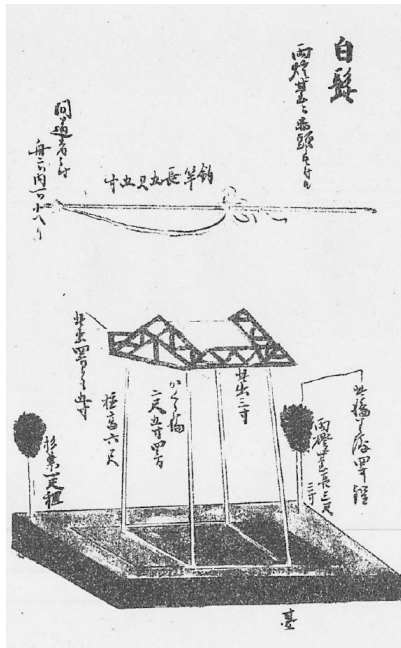
(六頁終)



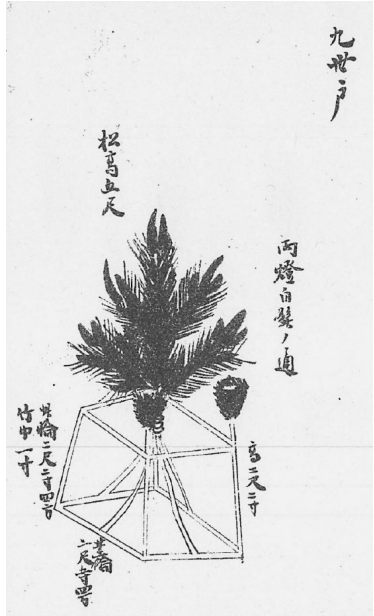
(9) 《西王母》 物長二尺三寸程 桃造花 此外桃実台入ル 此出  
 六寸 此出三寸五分 六寸 此出六寸 長四尺八寸 横二尺四寸  
 此外拵様宮ノ通 柱竹六尺八寸 ナヨタケフトキヲ用ユ



(11) 《白髭》 両燈台ニ赤頭を付ル 間道者之時舟二つ内一つ小へ  
 り 釣竿長九尺五寸 此輪差渡四寸程 両燈台長三尺三寸 此出三  
 寸 かくし輪二尺五寸四方 柱高六尺 此出四方とも五寸 杉葉一  
 尺程 台



(10) 《難波》 五寸 其外カツコウ見合 外ニ杉は、き 此竹六寸  
 五分 柱竹高四尺五分 此竹中五分 此竹中一寸 台輪ウシロ一尺  
 一寸 尤台輪六寸廻り位ノ竹二ツ割 一尺七寸 一尺七寸 二尺五寸  
 (七頁終)



(12) 《九世戸》 松高五尺 両燈《白髭》ノ通 高二尺二寸 此輪  
二尺二寸四方 竹中一寸 台輪二尺五寸四方

(八頁終)

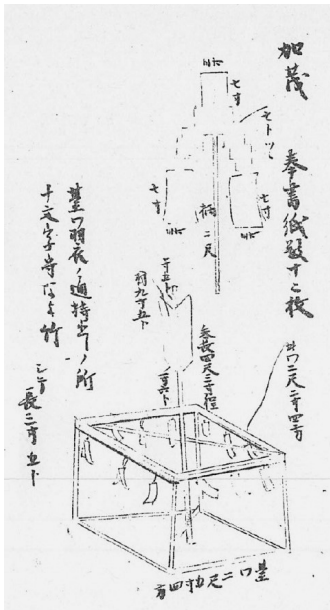


(13) 《敦盛》  
(14) 《生田敦盛》 《敦盛》ハカリ草斗 《生田敦盛》ハわらや斗り



(15) 《定家》 造花紅葉葛十六筋之内 四筋長七尺程 十二筋三尺  
五寸程 山 《水室》ノ通

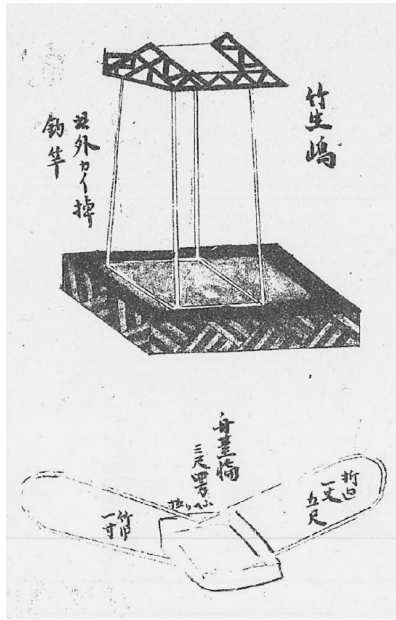
(九頁終)



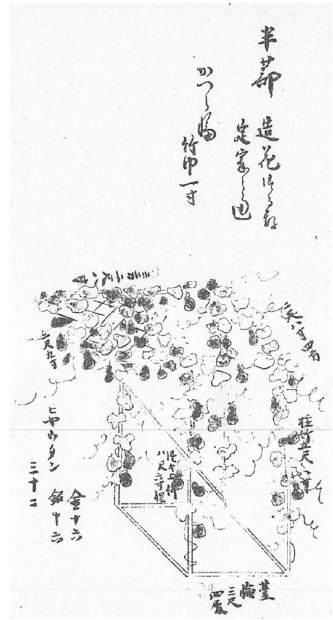




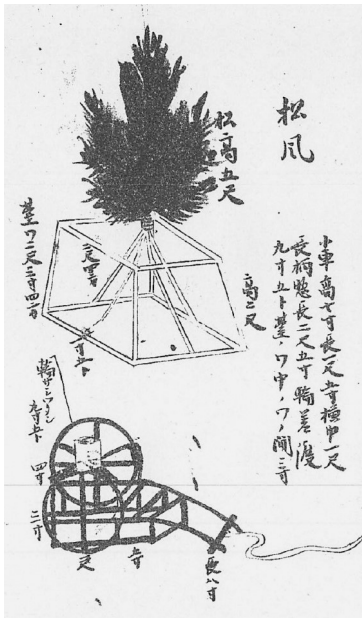
(21) 《竹生嶋》 此外カイ棹釣竿 舟台輪三尺四方 小へり五寸  
折廻一丈五尺 竹巾一寸



(20) 《半部》 造花つる様《定家》之通 かつら輪 竹巾一寸 二尺八寸四方 三方二尺八寸 二尺九寸 柱竹五尺八寸 つき 八尺六寸程 ヒヤウタン三十二 金十六 銀十六 台輪三尺四方



(23) 《松風》 松高五尺 高二尺 二尺四方 台ワ二尺三寸四方



(22) 《嵐山》 二尺三寸ヨ 此外杉ははぎ二本 二尺 桜造 二本 高 五尺余 持枝 二本



巾 一寸五分 小車 高七寸 長一尺五寸 横巾一尺 長柄懸長二尺五寸 輪差渡九寸五分台ノワ中ノワノ間三寸 輪サシワタシ九寸五分 四寸 三寸 長八寸 五寸 一尺

(十三頁終)



(24) 《葛城》 しもと萩三本ほど 長一尺一寸程 笠雪付 ほうし  
ハ綿也 柴長三尺余雪付ル

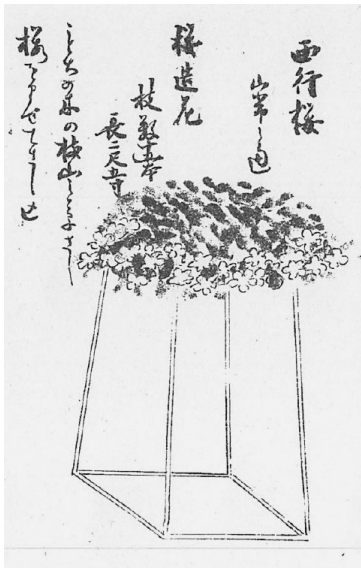


(25) 《俊成忠度》 《忠則》 此外二枝木ノ花

(26) 《住吉詣》 隨身兩人ノ時ハ二ツ弓二張矢八本 矢常ヨリ小フリ  
子方大小ニテかつこう見合 長シエン金元結入 わらハノ髪ニさす

(27) 《錦木》 此外二山作り物寸法 《氷室》之通

(十四頁終)



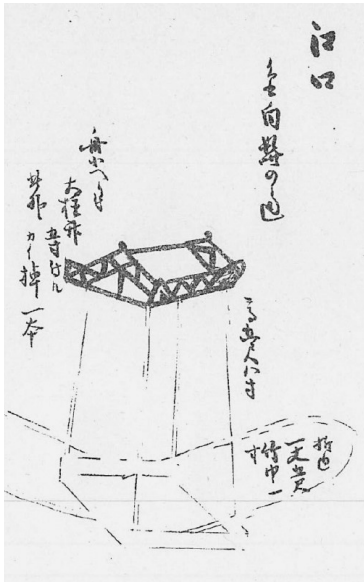
(28) 《西行桜》 山常之通 桜造花枝数十五本長二尺五寸 もちの

木の枝山の草さし桜をませてさし込



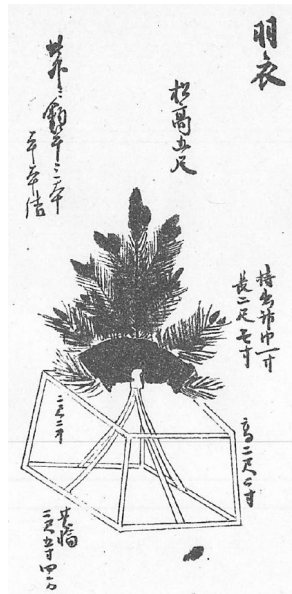
(29) 《遊行柳》 山常の通 柳造花十五筋長二尺五寸余

(十五頁終)



(30) 《江口》 宮《白髭》の通 舟小へり付大柱竹五寸付ル此外カ

イ棹一本 高五尺八寸 折廻一丈五尺 竹巾一寸



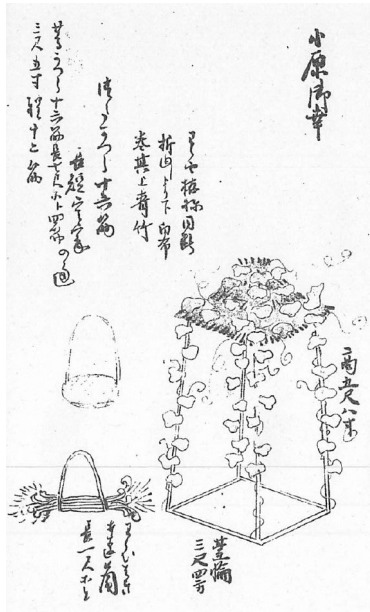
(31) 《羽衣》 松高五尺此外二釣竿三本平元結 持出竹巾一寸 長二尺七寸 高二尺二寸 二尺二寸 台幅二尺五寸四方

(十六頁終)



(32) 《雲雀山》 折り返しより下白布卷 わら屋《生田敦盛》の通 萩二本ツ、九通前戸拵方《黒塚》通 持花長二尺三寸程姫ゆり小

菊・杜若・うめ(?) つゝし尤造花



(33) 《小原御幸》 わらや拵様同断折廻しより下白布巻其上青竹  
 つたかつら十六筋長短二とおり つたかつら十六筋長七尺五分四筋  
 の通 三尺五寸程十二筋 高五尺八寸 台輪三尺四方 わらひはき  
 打違菊長一尺ほど

(十七頁終)



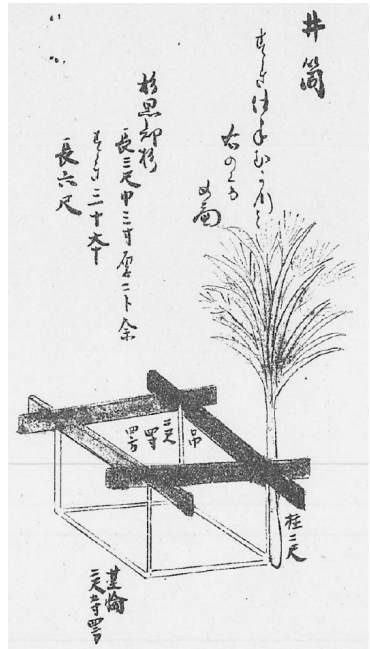
(34) 《藤》 松台《羽衣》の通 藤花六十筋 二十筋白長一尺  
 より一尺余程つる 三筋葉十五本

一一一

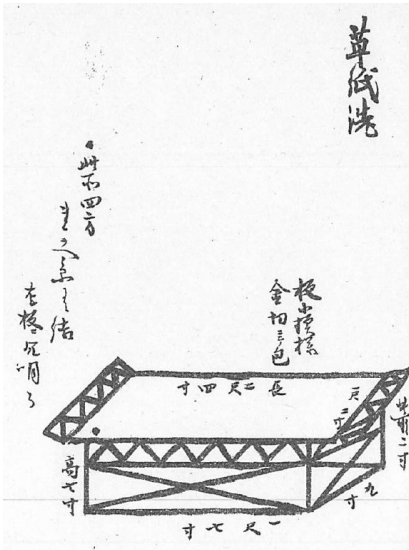


(35) 《小蝶》 梅立木高五尺四方面 台《羽衣》ノ通

(十八頁終)



(36) 《井筒》 すゝき仕手むかつて右の方 如图 杉黒部杉長三尺  
中三尺厚二分余 すゝき三十本長六尺 吊二尺四寸四方 柱二尺  
台輪二尺五寸四方



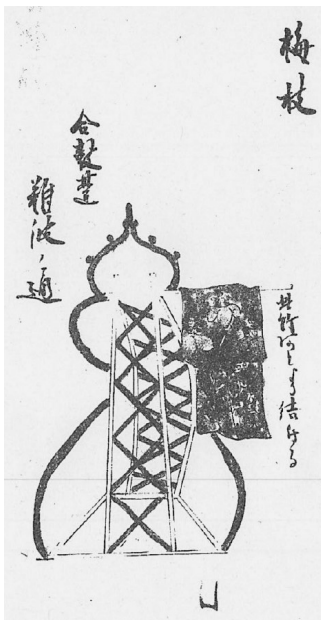
(37) 《草紙洗》 此所四方 ■■糸にて結 尤板二窓明る 板小短冊



(38) 《楊貴妃》 一尺 八棟造 柱高六尺 宮常之通拵あとに八棟  
付ル

金切ニテ包 此所二寸 一尺二寸 長二尺四寸 九寸 一尺七寸  
高七寸

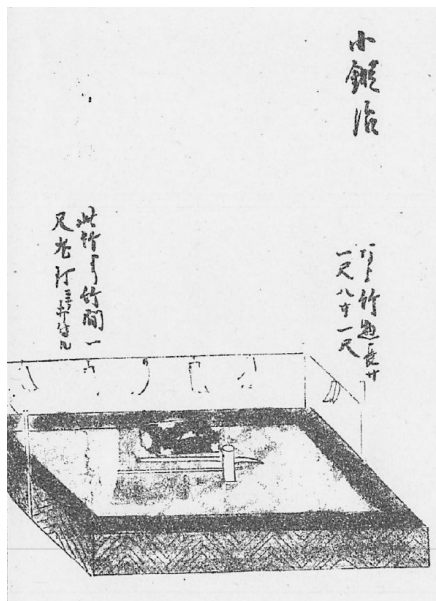
(十九頁終)



(39) 《梅枝》 合鼓台《難波》ノ通 此竹あとより結付る

(二十頁終)

(40) 《小鍛冶》  
尤釘ニテ打付ル

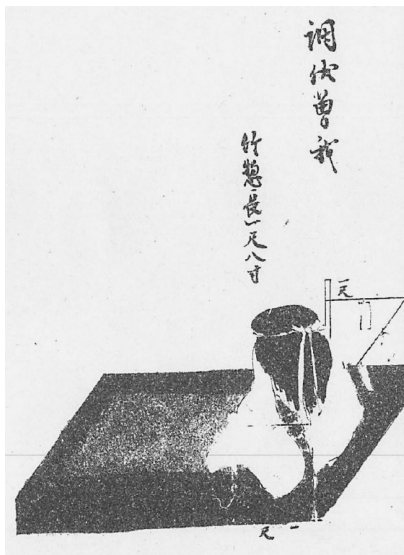


なよ竹惣長サ一尺八寸 一尺 此竹より竹間一尺

注

(1) 『梅若実日記 第二巻』梅若実著、八木書店、二〇〇二年四月発行、三二八頁

(41) 《調伏曾我》 竹惣長一尺八寸 一尺 一尺



(二十一頁終)

補記 貴重な伝書の閲覧・翻刻を許可下さった名古屋市蓬左文庫に感謝いたします。徳川慶勝の号について貴重な御教示を下さった徳川林政史研究所の藤田英昭先生に感謝いたします。本稿は二〇二二年度科学研究費助成基盤研究(C)「尾張藩の芸能保護・統制の実態と東海地域の芸能に与えた影響についての基礎的研究」(研究代表者：飯塚恵理人、課題番号：22K00304)による成果の一部となります。

\* 文化情報学部 文化情報学科